

『赤毛のアン』についてもう一度

NHKの朝ドラ「花子とアン」が終わりました。人気だった前作「ごちそうさん」を上回る高視聴率だったようです。主人公・村岡花子の生きざまがドラマチックであることに加え、脚本の中でL・M・モンゴメリーの「赤毛のアン」の原作を上手にかぶせていることが一つの要因になっているように私には思えます。それに美輪明宏の番組を締めくくる「ごきげんよう さようなら」も視聴者の心をつかんだのでしょうか。

実は『赤毛のアン』出版100周年だった2008年、私は物語の舞台カナダのプリンスエドワード島を訪れ、その模様をこのボイスメールで2回にわたりお伝えしました。その後しばらくしてから、作品のすべてがこのCDで朗読されました。それだけ視聴者の皆様の関心が強かったのではと推測したところでした。

この間に、筆者の私自身にも予想外の変化がありました。昨年11月、東京国際フォーラムの舞台に4回出演したのです。舞台芸術を通して国際交流に取り組むNPO法人・国連クラシックライブ協会が主催するミュージカル「赤毛のアン」の出演者の公募があり、知人の「出演してみたらどうですか？」との声に押されてその気になり、オーディションに行ったところ、発声、ダンス、自己紹介の三つがあり、なんと72歳で合格したのです。たぶん、作品の舞台プリンスエドワード島に取材で行っている、といったアピールがよかったのかもしれません。

公募は主役のアンとその友人、合唱・ダンスのメンバー。他は宝塚のトップスターなどプロの俳優がかためていました。公募の出演仲間は70代が自分を含めて2人、あとは10代から50代くらいまでの若い層でした。

実はカナダに取材に行った時もそうでした。

「エッ！いい年をしたオジサンがなんで少女物語の舞台なんかを訪ねるんだい？」。私自身も当初、ちょっと気恥ずかしさもあったのですが、英文の原書に加え日本で初の村岡花子訳と直近の松本侑子訳を読んでもみると、いやいや、どうして！作品は若い女性ばかりでなく、男性も、特に身体だけでなく心も枯れてきているシニアこそ、アンの瑞々しさを吸収すべきだ、との確信を抱くようになったのです。

孤児だったアンが、引き取ってくれたマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、それまで世間づきあいが苦手で、兄妹だけでさびしく生きてきた二人も、人を愛する喜び、人から愛される喜びを知って心豊かな大人へと成長していく。その人間としての幅の広がり、いろいろな示唆を与えてくれるような気もするのです。

ミュージカルのすばらしさは、舞台設営とコーラスにダンス、そして出演者の演技と歌唱が、活字だけでは表現できない情感を高めてくれることです。ミュージカルの特性を十分に堪能していくのに『赤毛のアン』は最適の文学作品の一つだと思います。

ということで、今回また同じ作品を取り上げ恐縮ですが、やはり『赤毛のアン』には人々の心を動かすものがある、生きる力を与えてくれるものがあるので、今また社会的にも焦点の当たった『赤毛のアン』について、少し角度を変えてもう一度お話ししたいと思った次第です。

モンゴメリーの原作を上手にかぶせ

番組の第 1 回目のナレーションに、まず原作のテーマを表徴した言葉をもってきていました。

「私がクイーンを出るときには、自分の未来はまっすぐにのびた道のように思えたのよ。いつもさきまで、ずっと見とおせる気がしたの。ところがいま曲がり角にきたのよ。曲がり角をまがったさきになにがあるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの」（第 38 章＜最終章＞ 道の曲がり角 村岡花子訳）

順調に見える人生も、途上で何が起こるかわからない。人生の曲がり角で、岐路で思いがけない障害に直面することもある。そのときにアンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いて欲しい——との著者モンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージの要約を番組で紹介したのです。

赤ちゃんをおぶって小学校に行っていたハナが教室で髪の毛をいたずらされからかわれたこと、伯爵令嬢だった蓮子との友情を「腹心の友」と名付けたこと、悪童に嘸したてられて家の屋根の上を歩いて転げ落ちたこと等々、どれもアンが体験してきたことです。原作『赤毛のアン』を読んでいる視聴者には「ああ、あそこの場面を引用しているナ！」とすぐに想像できたことでしょう。

作品が日本で最初に翻訳されたのは、戦後まもなく、山梨県生まれの村岡花子によってでした。戦時中、カナダ人の教師からアンの中絶原書を渡された花子は、灯火管制のもと空襲警報が出ると家じゅうの戸を閉め、外に光が漏れないようにした電燈の下で訳し続けた。英語が「敵性語」とされていた状況下、「日本の子どもたちに夢を！」との彼女の何ものにも屈しない勇気が扉を開いたのです。

本が出版されたのは、終戦まもない昭和 27 年（1952 年）でした。本文の名訳もですが、出色は「赤毛のアン」のタイトルです。もしこれが原作「Anne of Green Gables」の直訳「グリーンゲイブルズのアン」あるいは「緑の切妻屋根のアン」だったら、これほどまでに日本の読者を惹きつけなかったでしょう。彼女は当初「窓辺の少女」「窓に依る少女」「夢見る少女」といろいろ考えたようです。結果的に、編集者が持ってきたタイトル「赤毛のアン」に、当時大学生だった娘の「ピッタリだわ」との強い薦めに従って決まったのだといいます。「赤毛」はブロンドにも通じ、黒髪の自分たちとは違う異国の少女へのあこがれの的なものも含まれていたのかもしれませんが。「あかげのあん」との母音の繰り返しも心地よく聞こえます。

村岡花子と私の“出会い”は、彼女の最初の翻訳作品『王子と乞食』でした。戦後まもなく、まだ本も少なく買えなかった当時、子どもたちに人気だった「カバヤ・キャラメル」の会社が、販売促進の一環として空箱を集めて送ると児童文学本を送ってくれたのです。私は兄弟みんなで集めた空箱で『王子と乞食』を手に入れました。王子と乞食が入れ替わるといふ作品の奇想天外なストーリーに惹かれ、作者（マーク・トウェイン）は知らなくても、なぜか翻訳者の名前がいつか頭の中に入っていたのです。

以来、“Anne of the Green Gables”はこれまで何人にもよって翻訳されてきています。直近では松本侑子が挙げられるでしょう。彼女は原作に引用されている文章の出典を詳細に調べ上げた。その注釈を読んでいくと、作者 L・M・モンゴメリーがシェクスペア、バ

イロンを初め、ヨーロッパの歴史上の作家の作品や、キリスト教文化の原点・聖書から数え切れないほど引用をしているのがわかります。

可愛いおしゃべりとあふれる想像力

アンの魅力といえば、まずその可愛いおしゃべりでしょう。美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられます。

『赤毛のアン』を読んだアメリカ人の作家マーク・トウェイン（この段階で私も知るようになった）はモンゴメリーに、「かの不滅の『不思議な国のアリス』以来、最も可愛らしく、最も感動的で最も利発な子」と絶賛の手紙を送っています。

これから紹介するアンの言葉は、最も新しい松本侑子訳からの引用です。

「いいお天気朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワクするわ。今日一日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」（第4章 グリーンゲイブルズの朝）

「私の経験から言うと、物事は楽しもうと思えば、どんな時でも愉しめるものよ。もちろん、楽しもうと固く決心することが大事よ」（第5章 アンの生い立ち）

（マリラが）「・・・寝室は、眠るためにあるんだよ」

「まあ、マリラ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」（第16章 お茶会、悲劇に終わる）

——楽しい言葉ですよ。すべてを前向きにとらえ、人生を楽しみ、夢を広げていくアンの生き方がほうふつとしてきます。

またこうも言っています。

「人に謝って許されるって、ほっとして、気が楽になるわね。今夜は、星がきらきらしているわ」（第10章 アンのお詫び）

「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思うと、ほっとするわ」（第21章 風変わりな香料）

——自分の失敗をすなおに詫びる純粹さ。また失敗の多い日々の生活のなかでの乙女のやさしい心に読者は親近感を抱き、さらに、明るく毎日を生きようとするその考え方を、自らの人生に取り込もうとするでしょう。

NHK朝ドラの中で花子がときどき口にする言葉がありました。

「パルピテーション」——英語の「パルピタイト＝心臓の動悸がする」との動詞が名詞化されたものですが、番組では「心がドキドキする」「胸がときめく」といった意味で使われているのでしょう。年をとっても心がときめくような人生は素敵です。

そして最終章——競争の激しい大学への奨学金試験を勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーンゲイブルズを手放さなくてははいけないというマリラの苦悩……。それを知ったアンは、ここまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学をあきらめ村に居残ることを決めます。成長したアンの言葉がつむがれていきます。最初

に紹介した番組の第1回目に出てきた原書の言葉からの翻訳です。

「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に来たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっとすばらしい世界があるって信じるわ」 (第38章 道の曲がり角)

——本書のテーマを象徴する言葉とも言えるでしょう。いつも希望を捨てない、明るい未来を信じ努力していくアンの生き方に、物語の読者またミュージカルの鑑賞者は勇気づけられていくのです。